

崔承喜研究の動向と資料紹介

朴 祥 美 (パク・サンミ)

一. はじめに

今年、日韓合併一〇〇周年を迎え、朝鮮研究や日韓関係の再考を目指した多数のシンポジウム、学会が開催される予定である。それに関連して、筆者は、二〇〇八年三月二日(日)、九州大学・韓国研究センターにて開かれた第1回崔承喜研究会での報告を紹介したい。当研究会には、有馬学(九州大学)、松原孝俊(九州大学)、波瀲剛(九州大学)、永島広紀(佐賀大学)、木村理恵子(栃木県立美術館)、朴祥美(早稲田大学)が出席し、植民地・解放後の朝鮮に関するこれまでの個人研究や資料の紹介、そして今後の研究計画の提案を行った。

本稿では、植民地朝鮮と日本帝国の文化関係におけるキーパーソンとして活躍した朝鮮人舞踊家、崔承喜(チェ・スンヒ、一九一一～一九六九)に関する研究動向を紹介したい。崔承喜は、当時の朝鮮人女性としては極めて珍しく日本と朝鮮半島、そしてアメリカ(一九三八、一九四〇年)、ヨーロッパ(一九三九年)、さらには南米(一九四〇年)、中国(一九四二～一九四五年)等の世界各地で公演を行なうなど、国際的な活躍をした。解放後、北朝鮮で活動していた崔承喜の経歴は、朝鮮戦争後の朝鮮半島の特殊な状況によって、韓国では越北芸術家に関する議論自体がタブー視され、崔承喜はベールに包まれたまま「伝説的な舞姫」として語られてきた。冷戦後、韓国内でも崔承喜をめぐる研究が徐々に行なわれ始めたが、それらは崔承喜の個人的な記録に止まることが多く、彼女の活動の歴史的な評価にまでは至っていない。

筆者は、日本人舞踊家、石井漠の一生徒にすぎなかった崔承喜という植民地の女性を、日本帝国主義の文化的象徴として作り上げた歴史的過程について、アメリカ公演を中心として論じたことがある(『思想』975を参照)。それは、崔承喜の活動を、

一九三〇年代から四〇年代における日本帝国のアジアに対する軍事的拡大とともに展開された文化外交の枠組みで考えた上、舞台上の植民地朝鮮の女性に対し異なる空間(内地、朝鮮、アメリカ)の鑑賞者がそれぞれ多様なイメージを投影し、また、それによって舞台上の演じ手の如何なる文化的な変容までが引き起こされたかを分析したものである。舞台における崔承喜の身体をめぐる知識人たちの言説は、民族主義、植民地主義、帝国主義、そしてアジア主義という、戦時期の多様な歴史的な力学がせめぎ合う社会的・政治的な空間から形成された。このような解釈は植民地と帝国、文化と政治、民族主義と帝国主義の関係から展開される植民地における近代の多層性を明示している。

二. 今後の研究課題

①研究事例の拡大

当時、崔承喜と同じく文化的シンボルとして活躍していた李香蘭については、かなり研究されているが、朝鮮人芸術家や文化人に関しては、崔承喜にかぎらず、より広く調査されていく必要がある。たとえば、石井は崔承喜以外に朝鮮人の男性舞踊家、趙澤元を弟子に持っていた。石井の他の弟子たちと崔承喜との関係に関する研究は、朝鮮人女性としての崔承喜の位置を理解するに有用であろう。

②観客の階級問題

崔承喜の公演に対する朝鮮人の鑑賞を民族主義の観点からだけではなく、階級の面からも考察していく必要がある。彼女の観客は殆どが知識人であり、彼らの公演に対する理解力は高かったとも言われている。確かに観客には、商業劇場で行なわれる崔承喜の公演を鑑賞できるだけの金銭的余裕と、新舞踊を理解できるだけの知識を持つことが求められたかもしれない。しかし、崔承喜が労働者階級の観客も集

めたのか、またはそれが「草の根の民族主義」の形成にも影響を与えたのか、などについては研究されていない。

③解放後の北朝鮮における崔承喜の活動

一九四六年、崔承喜は夫である安漠に従って北朝鮮に行き、その後、金日成政権下で二人とも政治と文化の両方の分野で要職について活躍した。崔承喜は平壤に「崔承喜舞踊研究所」を設立し、朝鮮人民委員会の代議員としても活動した。しかし二十年後、彼らの運命は変わり、一九六〇年代後半に二人ともパージされた。解放後の北朝鮮における崔承喜の活動と国家内での役割に関する研究は、芸術に対する彼女の認識の変容を探るため、また、金日成政権下で「主体」イデオロギーを宣伝するために崔承喜の「文化的」あるいは「芸術的」演出がどのように政治的な意味付けを付与されたかを理解する上で重要であろう。

三. まとめ

崔承喜の文化活動の芸術性とは別に、その中に含まれている政治的な意図を取り出すことは、帝国経験を日本の近代史に位置付けるに際して重要である。崔承喜という植民地女性は、内地と朝鮮における大衆の熱狂的な支持によって、また知識人、政治家、ジャーナリストなどのそれぞれの立場における思惑によって創り上げられた時代のアイコンであった。彼らはそれを朝鮮の民族主義であれ、日本の帝国主義であれ、自国の文化の産物として取り上げようとした。崔承喜研究は、帝国主義と民族主義の矛盾した関係や日本と朝鮮における近代概念の複雑さ、また日本帝国文化の相反する多層的な一面を再考する一助となると思う。また、崔承喜誕生一〇〇周年を迎える二〇一一年には、崔承喜の経験を踏まえた、帝国日本と植民地朝鮮における文化政治に関するシンポジウムを開催したいと考えている。本稿は、そのプロジェクトに向かった一歩である。

四. 資料の紹介

①朝鮮語（注：各原書の下段に日本語訳）

김재원 「구주에서의 최승희」 『조선일보』 (1939년 3월 14일).

〔金載元 「欧州での崔承喜」 『朝鮮日報』 (一九三九年三月一四日)。〕

정병호 『춤추는 최승희』 (서울: 뿌리깊은나무, 1995).

〔鄭柄浩 『踊る崔承喜』 (ソウル:プリギブンナム、一九九五)。〕

최승일편 『나의 자서전』 (경성: 이문당, 1937).

〔崔承一編 『私の自叙伝』 (京城:イムンダン、一九三七)。〕

최승희 「무용 15년」 『조광』 (1940년 1월).

〔崔承喜 「舞踊十五年」 『朝光』 (一九四〇年一月)。〕

최승희 「춤추는 조선: 동란의 구주를 피해」 『조선일보』 (1940년 1월 27일).

〔崔承喜 「踊る朝鮮: 動乱の欧州を避けて」 『朝鮮日報』 (一九四〇年一月二七日)。〕

최승희 「돌아온 최승희: 춤의 세계일주담」 『신시대』 (1941년 1월).

〔崔承喜 「帰ってきた崔承喜: 踊りの世界一周談」 『新時代』 (一九四一年一月)。〕

한설야 「무용사절 최승희에게 보내는 서: 희화화된 조선정조」 『사해공론』 (1938년 7월).

〔韓雪野 「舞踊使節崔承喜に送る書: 戯画化された朝鮮情調」 『四海公論』 (一九三八年七月)。〕

한성준 「고수 50년」 『조광』 (1937년 4월).

〔韓成俊 「鼓手五十年」 『朝光』 (一九三七年四月)。〕

②日本語

石井漠 「崔承喜のこと」 『舞踊日本』 (一九三四年八月)。

小宮襄二 「崔承喜を見る」 『舞踊新潮』 (舞踊新潮社、一九三六年十月)。

外務省 『文学美術及演劇関係雑件、演劇関係』 一九三八。

金賛汀 『炎は闇の彼方に』 (東京: 日本放送出版協会、二〇〇二)。

崔承喜 『私の自叙伝』 (東京: 日本書藏、一九三六)。

高嶋雄三郎 『崔承喜』 (東京: 学風書院、一九五九)。

平林久枝 「崔承喜と安漠」 『季刊三千里』 (一九七八年五月)。

朴祥美 「〈日本帝国文化〉を踊る: 崔承喜のアメリカ公演 (一九三七—一九四十) とアジア主義」 『思想』 975 (東京: 岩波書店、2005年7月): 126-146。

三島由紀夫 『わが思春期』 (東京: 集英社、一九七三)。

村田春彦 「哀れ崔承喜」 『舞踊新潮』 (舞踊新潮社、

一九三七年十一月)。

『NHK ラジオ アンニョンハシムニカ、ハングル講座』(東京:日本放送出版協会、二〇〇三年五月)。

「外遊を控えて張り切る崔承喜、あちらの抱負を語る」『朝日新聞』(一九三七年八月十五日)。

「崔承喜、欧米で好評の新作を踊る。先ず非公開で白衣勇士慰問」『国民新聞』(一九四一年二月四日)。

「崔承喜さん舞踊会:素晴らしい前景、米人方面の期待は大きい」『新世界朝日』(一九四〇年四月三日)。

「崔承喜の美容運動」『ホーム・ライフ』第一年・第四号(大阪毎日新聞社、一九三五)。

『崔承喜パンフレット第二輯』(東京:崔承喜舞踊研究所、一九三六)。

「伝説の舞姫崔承喜を追う」『セヌリ』十月号(セヌリ文化情報センター、二〇〇〇)。

「半島の舞姫」好評」『朝日新聞』(一九三八年二月二二日)。

「半島の民謡踊りを世界的舞踊に:美人舞姫、崔承喜さん着桑」『新世界朝日』(一九三八年二月一日)。

「半島の麗人崔承喜さんの舞踊、千余の観衆を魅了:充実したプログラム何れも拍手の嵐」『新世界朝日』(一九四〇年四月九日)。

③英語

Fisher, Marjory, “Sai Shoki Proves Fine Artist: Soloists Featured at Y. P. ‘Sym’,” *San Francisco News* (8 April 1940).

G. N. B., “Sai Shoki,” *Dance Observer* (January 1940).

Kolodin, Irving, “Sai Shoki Dances: Korean Artist Reappears in Guild Theater,” *New York Sun-Herald* (7 November 1938).

Martin, John, “Sai Shoki Is Seen in Korean Dances: Young Oriental Artist Offers Her Second Program Here,” *New York Times* (7 November 1938).

Park, Sang Mi, “The Making of a Cultural Icon for the Japanese Empire: Choe Seung-hui’s U. S. Dance Tours and ‘New Asian Culture’ in the 1930s and 1940s,” *Positions: east asia cultures critique* 14:3 (Durham: Duke University Press, Winter 2006): 597-632.

Rialtan, “Sai Shoki Charms Dance Fans,” *Los Angeles Evening Herald and Express* (1 April 1940).

Smith, Cecil, “Sai Shoki Has a Light Touch for Her Dances,” *Chicago Tribune* (23 February 1940).

Terry, Walter, “The Dance Festival,” *New York Herald Tribune* (7 January 1940).

Van Zile, Judy, *Perspectives on Korean Dance* (Middletown, Conn.: Wesleyan University Press, 2001).

Vitak, Albertina, “Sai Shoki, Dec 28,” a section in “Dance Events Reviewed,” *American Dancer* (February 1940).

Ware, Walter, “Sai Shoki: Korean Dancer of the Far East,” *American Dancer* (November 1938).

“Here from Korea,” *Chicago Daily News* (22 February 1940).

“Japanese Dancer at Curran Sunday,” *San Francisco News* (3 April 1940).

“Korean Danseuse,” *New World Sun* (25 January 1938).

“Korean Pavlowa [sic] to Dance Here: Famous Oriental Chooses S. F. for Debut,” *San Francisco Chronicle* (12 January 1938).

“Program Given for Sai Shoki’s Farewell Recital,” *New World Sun* (4 April 1940).

“Sai Shoki and Huapala Appear in Exotic Dances: Korean and Hawaiian Women at Guild Theater,” *New York Herald Tribune* (21 February 1938).

“Sai Shoki is Truly Beautiful: Expects Much of San Francisco Debut,” *New World Sun* (13 January 1938).

“Sai Shoki Makes Good,” *Seoul Press* (23 February 1937).

“Sai Shoki, Premier Korean Dancer to Give Concert Today at Curran,” *New World Sun* (7 April 1940).

“Sai Shoki Returns to Score Another Triumph in Engagement at Curran; South America Next on Her Tour,” *New World Sun* (9 April 1940).

“They All Dance,” *Chicago Tribune* (12 December 1937).

④ドキュメンタリー・フィルム

Choe Seung-hui: the Korean Dancer (NJ: Kultur, 1998).